

Marcia L. Colish: *The Stoic Tradition from
Antiquity to the Early Middle Ages.*

I Stoicism in Classical Latin Literature

1985. E. J. Brill. pp. xii+446.

水 落 健 治

1. ストア哲学が初期中世に対してどのような影響を与えたのかという問題はきわめて重要な問題でありながら、これについての包括的な研究は、これまであまり出版されて来なかった。本書は、ストア哲学の初期中世への伝搬を扱う2部作の第一分冊であり、〈古代哲学や文献学において行なわれてきたストア研究〉と〈教父研究との関連において行なわれてきたストア像〉との間の溝を埋めようとの意図から執筆された労作である。

著者 Marcia L. Colish は、アメリカ、オハイオ州 Oberin College の歴史学の教授であり、中世〜ルネッサンス期の思想史を専門としている。主たる関心は、中世の言語理論や文学理論にあり、これまで、ストアの仮言三段論法のラテン世界への伝搬や、セネカとエラスムスの関係などについての論文を発表して来た。

2. 著者はまず、「研究方法の問題」を論ずる（序論）。著者によれば、これまでストア哲学の伝搬に関する研究は主に二つの方法で行なわれて来た。その第一は「文献学的方法」*Quellenforschung* であり、この方法は、ストアの影響を受けたと思われる様々な文献を写本にまで遡って個々の用語に注目しながら厳密に比較検討する。また第二の方法は「概念史的方法」*Ideengeschichte* であり、ここでは、個々の概念に注目しつつ、作家の思想体系を再構築し、その体系をストアの体系と比較することによって、ストア哲学がその作家に及ぼした影響を確定しようとする。しかし著者は、これらの方法は、いずれも不適切であるという。なぜなら、①初期ストアの文献は断

片的な形でしか残っていない、②ストアの著作はいわゆる ‘doxographers’ によって伝承されたが、彼らはしばしば ‘philosophical rigor’ を欠いている、③初期ストアのギリシア語著作がラテン語に翻訳されるに際して個々の用語の訳語は必ずしも一定ではなかった、④ローマ期の著作家はストアの思想を「間接的に」、「非学問的な仕方」で受容したので、彼らの中にはストアの思想と当時の通俗思想とが混在しており、両者を区別することは困難である、等の理由によって、文献学的方法や概念史的方法では問題を十分な仕方に取り扱えないからだ、というのである。

そこで著者は、ストア哲学の初期中世への伝搬の問題を扱うに際して、次の二点が重要であると主張する。①ローマ期の個々の著作を扱うに際しては、その著作家がいかなる目的でストアの思想を受容したのかを無視してはならない（いわゆる *Sitz im Leben* の問題）、②ストアの思想を受容した人々の多くは専門の哲学者ではなく、したがって受容は様々な文学類型に及んでいたため、考察の対象は単に狭義の哲学書に限定されてはならず、文学・修辞学の教科書、歴史書、風刺詩、叙事詩、*Doxography*、法学書なども考察の対象に加えられなければならない。

3. こうして、本書は6章に分けられる。第1章：Stoicism in Antiquity では、まずストア思想の大まかな流れが、the ancient Stoa, the middle Stoa, the Roman Stoa という時代区分に従って述べられ、各時期の主要著作家が概観される。その後、一般に「ストアの学説」と称されるものが、学の三分——自然学、倫理学、論理学——に従って、Arnim, *Stoicorum Veterum Fragmenta* などを資料に述べられる。この部分の叙述の特色として特に印象に残ったのは、ストア哲学の意図が一貫して「プラトン・アリストテレス的二元論の克服」に存していたことに関する著者の指摘 (p. 23) であり、また彼らの言語理論や文法理論が中世の自由学芸や様々な文学形式 (‘diatribē’ や ‘consolatio’ など) に多大な影響を与えたという点 (pp. 57ff.) である。

第2章では、ストアの思想をラテン世界に伝えるに際して特に重要な役割を果たした人物としてキケロが扱われる。著者はこの箇所、政治家としてのキケロが置かれていた立場とその著作との間の密接な関連を強調する。キケロは、政治家として同時代人を教育するために、また、自らの思想的立場を鮮明にして政敵の非難に対して弁明するために様々な著作を残した (p. 76)。彼のストア哲学やその他の哲学学派に対するある種複雑な態度はこの観点から理解されなければならない。キケロが採用した文学形式は、彼が同時代の様々な思想を批判・論駁する際の姿勢と密接な関連がある。こ

うして著者は、以下キケロの修辞学理論、政治・法理論、認識論（アカデミア派論駁）、宇宙論、倫理学などの各主題毎にキケロのストアに対する態度を検討し、それがかなり複雑なものであったことを結論する（pp. 152 ff.）。そして、キリスト教の護教家や教父たちによるキケロ復興が、彼らの「キリスト教的」意識とどのように関わっていたかを明らかにする（pp. 156 ff.）。

第3章では、風刺詩人たち Satirists が扱われる。彼らの詩が哲学的内容をもつことは以前から研究者によって指摘されて来たが、彼らは時代批判のためにストア哲学を用いた。ストア派やキュニコス派で用いられていた ‘diatribē’ の文学類型が彼らの詩の中に現われていること、および、ローマ最初の Satirist と言われる Lucilius (2c. B. C.) がストア哲学を ‘Latin satiric form’ に変容させたことがまず指摘され（pp. 159f.）、次いで、Horatius (65-8 B. C.), Persius (A. D. 34-62), Juvenalis (A. D. ca. 60-ca. 140) —— 彼は「健全な精神が健全な肉体に宿っていない」ことを嘆いた詩人として有名——のひとりひとりについて議論が展開される。いま Horatius について述べると、ここでは、彼の作品中に現われる ① ‘moderation’ の観念、② ‘simple country life’ と ‘heroic public life’ との緊張感、③「知者」の観念がストアの影響のもとにあることが指摘され、また、④彼の詩作の理論も、‘Stoic conception of the nature and function of poetic style’ とのある種の親近性を有することが語られている（p. 188）。

第4章：The Epic Poets では、Vergilius, Lucanus——彼はセネカの甥である——、Statius, Silius Italicus という4人の叙事詩人が扱われる。叙事詩において現われるストア的要素は、風刺詩の場合と比較すると比較的小数であり、① ‘fate’, ② ‘gods’, ③ ‘interaction of the divine will with human choices’, ④ ‘the moral character of the epic hero as well as the personages with whom he is contrasted’（p. 225）などに限られている。しかも個々の詩人がこれらの概念をどの程度自分のものとしているかは、詩人によって異なるという。紙面の関係上ウェルギリウスについてのみ紹介すると、著者はウェルギリウスのふたつの代表作 *Aeneis* と *Georgica* についてそのストアの影響を考察する。*Aeneis* については①運命の作者としての神、②知者、③敬虔 pietas、④精神の不動 apatheia などがストア的用語で述べられていることが指摘されているが（p. 237）、評者にとっては *Georgica*, 1. 490-97 の ‘felix qui potuit rerum cognoscere causas’ の考察（pp. 227 f.）が興味深かった。

第 5 章 : Historians, Lesser Poets, Scholiasts, Pedagogues and Encyclopedists では、これまでに取り上げられなかった様々なジャンルの作家たちが取り上げられる。第一の部分 (The Historians) では、まず歴史家として Sallustus, Livius, Tacitus が取り上げられ、彼らにおいてストアの時間概念や人間論、靈魂論が歴史理解のために用いられていることが示される。第二の部分 (Minor Poets: Manilius) では Manilius の作品に現われる 'cosmic logos' の問題が扱われ、第三の部分 (The Scholiasts) では初期ストアに関する様々な情報を与えてくれる Servius や Macrobius が残した注釈書の意義などが論じられる。Varro や Donatus らについて論ずる第四の部分 (The Grammarians) と、Quintilianus や Augustinus, Martianus Capella, Cassiodorus について論ずる第五の部分 (Rhetoricians, Dialecticians, and other Pedagogues) とは内容的に連続しており、ストアの言語理論 (e. g. 音と言語の関係の問題、言語の起源の問題 etc.) や論理学 (e. g. 仮言三段論法) が初期中世や自由学芸などにどのように伝えられて行ったかが論じられている。この部分は、おそらく著者が特に関心をもっている所らしく、大変興味深く読むことができた。

最後の第 6 章 : Stoicism in Roman Law では、ローマ法の問題が論じられている。ローマ法は、これまでストア哲学の深い影響のもとに成立したと言われて来たが、著者は、その影響がどのようなものであったのかを、これまでの膨大な研究を踏まえて明らかにしようとする。そして、ローマ法に対するストアの影響が、むしろ偶然的・表層的であったことを結論している (p. 389)。

4. 以上われわれは、本書の内容を概観した。総じて言えることは、本書は、ストア哲学の初期中世への様々な領域における影響を「全体として」、「包括的に」解明しようとした大変な労作であるということである。このことは、巻末に掲げられている参考文献が 1600 に及んでいることひとつを採っても明らかであろう。従って本書は、古代末期から中世初期のストアの問題を考える際して百科事典的に用いることが可能である。個々の問題の研究者は、本書に論じられている事項や参考文献をいわば「出発点」として、さらに深く研究を進めてゆくことができるのである。その意味で、本書はこの分野の基本文献と言えるであろう。

しかしこのことは、本書に問題点が全くないことを意味するわけではない。特に、第 1 章 II (The Teachings of the Stoics) で「ストアの学説」として述べられていることがらについては、現在のストア研究の水準からして、承認できかねる箇所も幾つ

かあった (e. g. p. 52 冒頭の 'phantasiā kataleptike' に関する説明など)。ほかならぬこの部分の内容が、以下の章で論じられる各著作家におけるストアの影響を判定する「尺度」となっているだけに、この部分の叙述の弱さははなはだ残念である。しかし、本書が執筆された本来の目的からすれば、このことも仕方のないことなのかも知れない。

Saint Augustin.

dossier conçu et dirigé par Patric Ranson,

Szikra, Giromagny. 1988, pp. 491

宮 本 久 雄

西欧の知と生の解体は依然密かに進行している。しかしその知と生は、歴史と地理を超えて万人の知と生をにない得た巨大な複合、豊饒の地のようなものであっただけに、この解体自身が何か生産的な知と生の営みとして、その実りを予想させずにはおかないものであろう。その一つの兆候は、この解体の触手が遡源的に西欧の成立の根底そのものともいえるアウグスティヌスに向けられているということに現われている。本書にはそうした西欧の自己解体の密かな震動が感ぜられる。

本書の内容は5部に分れる。第1部は、アウグスティヌス、矛盾のしるしと題され、以下第2部は、彼の哲学、第3部は、アウグスティヌスと教父たち、第4部は、『告白』、第5部は、アウグスティヌスの系譜と題され、内容の多彩・複雑をすでに窺わせている。ここで各部に含まれる全論文を詳細に解説報告する余裕はないので、各部から幾編かの代表的論文をとりあげ、その特徴を示しつつ、最終的に本書の秘める密かな西欧解体の震動の問題性を披瀝したいと思う。まず第1部の論文「西欧の教義的昏睡」は、アウグスティヌスが、生けるペルソナの神をギリシア哲学の「存在」と同一視し、啓示をも思弁に還元するキリスト教哲学の元凶ときめつけた上で、14世紀に展開されたギリシア神学者グレゴリオス・パラマスとラテン・アウグスティヌス主義者バルナムとの論争に言及している。そこでパラマスが、神の不可知な本質と分有可能で可知的なエネルゲイアを区別し、人間がこのエネルゲイアに与って神的生命に